

東京の近代化と浅草花屋敷

小沢 詠美子

成城大学講師

はじめに

1. 花屋敷設置の目的
2. 動物飼育の開始
3. 花屋敷と東京府
4. 動物園化する花屋敷 ～むすびにかえて～

キーワード 浅草花屋敷、森田六三郎、植木茶屋、動物園、近代化

はじめに

現在も浅草寺本堂の裏手にある「浅草花やしき」は、人気の遊園地であるが、もとは江戸時代につくられた庭園で、江戸名所のひとつである。花屋敷については、すでに拙著『江戸ッ子と浅草花屋敷』¹などにおいて、花屋敷の成立した江戸末期から明治半ばごろまでを中心に、その経営の軌跡が明らかにされている。本稿では、明治20年代までを中心に、東京の近代化における花屋敷の存在意義について検討する。

1. 花屋敷設置の目的

1850年（嘉永3）12月に、駒込千駄木町菜飯茶屋六三郎から、浅草寺代官所に提出された願書には、以下のように記されている²。

（前略）私父太右衛門儀年来右渡世罷在候段難有仕合奉存候、（中略）然ル処右太右衛門儀近来病身ニ相成渡世相成兼候ニ付、十月中奉御返地候処、猶又私儀同様渡世仕度右御地所拝借奉願上候処、近年兎角人廻リ悪敷渡世薄ニ相成難渋仕居候折柄、奉恐入候儀ニ者御座候へ共、是迄渡世仕居候菜飯茶屋者相止、此度植木茶屋ニ渡世替仕、（中略）願之通御聞濟被成下候上者、右場所江四季之原木植付、植木茶屋渡世替仕度奉存候（以下略）

すなわち、六三郎の父が病身になり、長年営んでいた菜飯茶屋を自分が引き継ぎたいが、近年はとかく客の出足が悪く経営の利益が薄くなり困っているのです、これまでの菜飯茶屋をやめて、四季の樹木を植えて植木茶屋に転業したい、と願い出たのである。この願主こそ、当時すでに人気・実力ともに江戸の人びとに認められていた植木屋、初代森田六三郎であった。この願書は、翌年正月に許可されている³。そこには、六三郎の茶屋が繁盛すれば人出も増えるので、他の店も利益が上がるだろうという浅草寺代官の思惑も反映されていたのである。

当時の浅草寺界隈の商況についての風聞を、南町奉行所では次のように把握していた⁴。

浅草寺ノ境内江新規梅林出来候は、右地内賑ひ候様可致企ニ有之、参詣人数目立候程職は不致候得共、薄情ニ流レ候哉、賽物上り高少く境内楊弓場見世もの其外諸商人も右ニ准し難渋致し候迎、伝法院ニ而目論見梅林之儀願相濟、千駄木植木屋六三郎儀受負梅樹其外植込場所之儀は、(中略)浅草寺役者同所代官等相加り、弥出来致し候上は徳益ニも可相成と頻ニ粉骨致し候趣

つまり、ここでは「梅林」と記されている六三郎の営む植木茶屋は、浅草寺境内が賑わうように計画されたもので、薄情に流れたためか賽銭収入が減り、境内の商人らもそれに伴い難渋しているのです、「伝法院」すなわち東叡山主で浅草寺の別当を兼任している輪王寺宮が企画し、六三郎が請け負い、浅草寺の役者や代官も参加して、完成後には利益にもなると期待されていた、というのである。なお、実際には浅草寺側が花屋敷の開設に関与した事実はない。

この風聞に対しては、南町奉行所も「浅草寺奥山は容姿のよい茶屋女が何人もいて遊客で賑わっていたが、近ごろはそうした者もない」と同様の見解を示しており、以上のことから、花屋敷の設置にはいわゆる町おこしの効果が大いに期待されていたことがわかる。



歌川広重「浅草金龍山奥山花屋敷」(国立国会図書館デジタルコレクション)

2. 動物飼育の開始

花屋敷が一般公開されたのは、1852年（嘉永5）の夏ごろと考えられる。『武江年表』には、同年の項に「春の頃より、浅草寺奥山乾の隅林の内六千余坪の所、喬木を伐り梅樹数株を栽へ」、四季の草木を植え、池を掘り、所々に小さな休息所を設け、夏に完成して六月から見物客が訪れていたと、記されている⁵。また、「巷街贅説」にも、「梅さくら紅葉など植こみて、四季の草花そへて」、山や泉、茶屋などがあり、秋には菊花を作って遊客が多く集まる、との記述が見られる⁶。このように、開園当初は四季の植物で賑わう日本庭園であったことがわかる。

花屋敷を誕生させた初代六三郎は、1860年（万延元）閏3月に没したことが、同家の過去帳により確認できる⁷。二代目を継いだのは悻の半三郎で、まじめに家業を受け継いでいたことが、子孫である川畑貞子氏の記した「偲び草」に記されている⁸。そして、初代の没した直後の同年10月、イギリスから来日した園芸学者であるロバート・フォーチュンが花屋敷を訪れており、その模様を次のように記している⁹。

（前略）浅草の花屋敷には見物客の娯楽のために、鳥や他の動物を収集して見せるので、観客がふと博物学の動物類に興味を持つかも知れない。コレクションは、緑色のハト、斑点のあるカラス、立派な大ワシ、金銀の羽を持ったキジ、オシドリ、ウサギ、リスなどが目についた。そこは概して、遊山に来る江戸市民の娯楽と教訓を当てこんで、いろいろなものがある。そこは梅や桜の花時には、本当に楽しい所に違いない。

フォーチュンの記述から、当時の花屋敷には植物だけでなく、さまざまな動物が飼育されていたことがわかる。もともと江戸では、珍獣・珍鳥を見せる「花鳥茶屋」「孔雀茶屋」と呼ばれる施設が人気を集めており¹⁰、山東京伝『唯心鬼打豆』¹¹にはクジャクやオウムが、同「七色合点豆」¹²にはヤギらしき動物の姿が、ともに「御休所」と書かれた掛け行灯の前に描かれている。したがって、花屋敷のみが特殊な施設というわけではない。しかし、植木屋の本流であった初代六三郎が、動物飼育を始めたとは考えにくい。二代目が、名人であった父との差別化を図るために発案したと考えるのが妥当であろう。

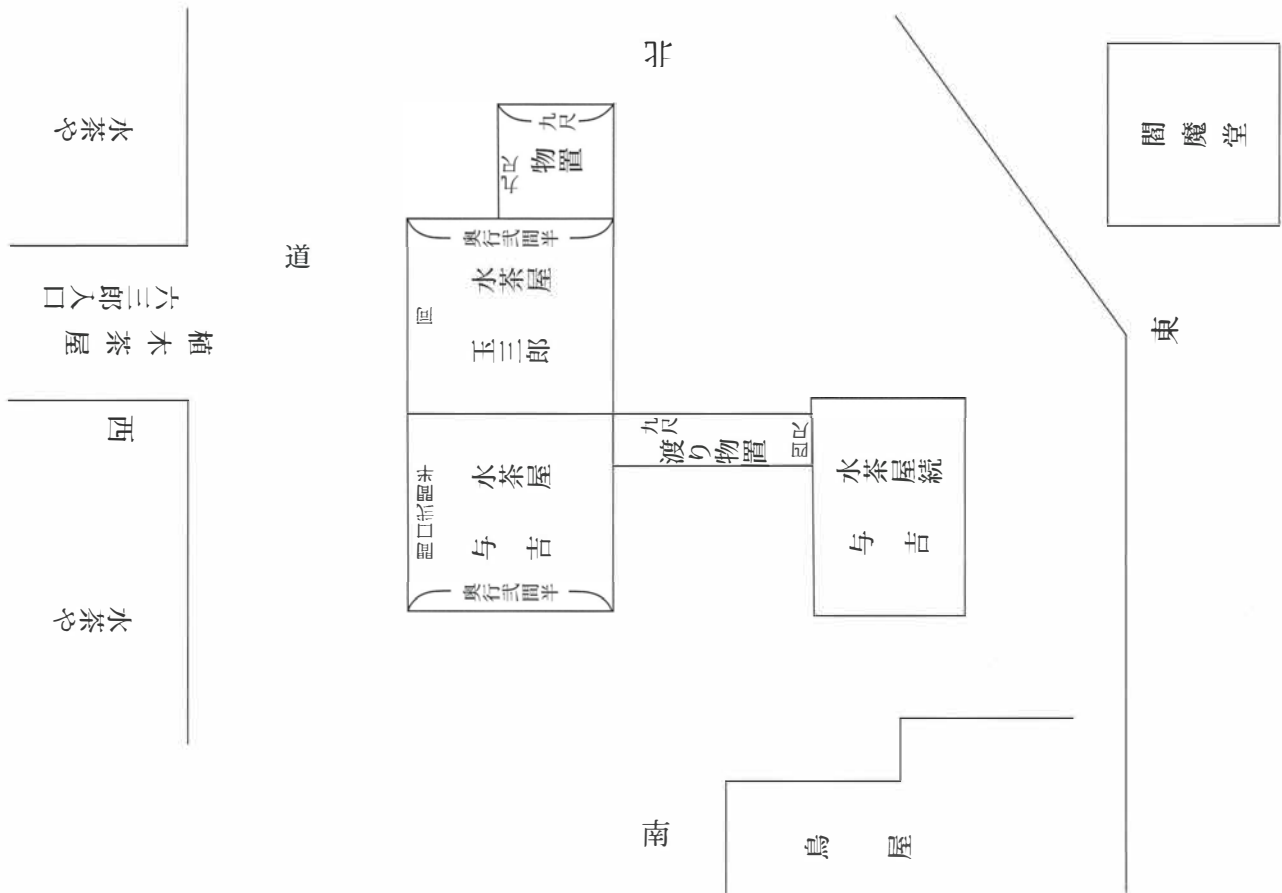


『七色合点豆』に描かれた花鳥茶屋
(国立国会図書館デジタルコレクション)



鳥屋の名前の並ぶ「家兎競」
(江戸東京博物館蔵 09200189)

では、実際に動物飼育を担当していたのは誰か。植物の栽培だけでなく、動物飼育まで二代目自身で行っていたかといえ、それも考えにくい。『浅草寺日記』には、1863年（文久3）における花屋敷周辺図が掲載されている¹³。そこに、花屋敷を示す「植木茶屋 六三郎入口」という表示の向かいに「鳥屋」と記入されているのである。鳥屋とは、文字通り鳥を扱う店のことであるが、『摂津名所図会』には、観賞用の小鳥や、カモ・ガン・ニワトリなどの食肉や卵を販売する様子が描かれている¹⁴。しかしほかにも、ペットとしての狆や¹⁵、明治に流行したウサギを扱っていたことも確認できる¹⁶。つまり、現代のペットショップとブリーダーを兼ねていたのが、鳥屋であった。



「植木茶屋」花屋敷と「鳥屋」（『浅草寺日記』第32巻P457の図をもとに作成）

さて、花屋敷の向かいにあったこの「鳥屋」であるが、浅草寺に残る1869年（明治2）の「記録」にも登場する¹⁷。本堂を修復することになった浅草寺では、この年から3年間にわたり、山内で営業している店々から奉納金を集めることとなり、「奉納調書」が作成された。そこに「同 鳥茶屋 三次郎」という署名が見られるのである。「同」とは花屋敷のことで、ロバート・フォーチュンが関心を示していたのが、まさしくここであった。この「鳥茶屋」は、図の「鳥屋」と同一人物であると解釈するのが合理的であろう。

三次郎については、1902年（明治35）に刊行された『風俗画報』に、詳しく紹介されている¹⁸。同書によれば、三次郎は浅草奥山に住み、ツルやクジャクをはじめとしてヒツジやサルまでさまざまな鳥獣を飼育し、この「観物屋」の入口で若干の料金を支払えば鳥獣を自由に見ることができ、さらに客が動物にエサをやるサービスもあったという。

二代目は、三次郎の協力を得、父の築いた植木茶屋に花鳥茶屋の魅力を加え、あらたな花屋敷を作り出したのである。

3. 花屋敷と東京府

江戸幕府が瓦解し、明治政府が誕生すると、花屋敷を巡る環境は一変し厳しさを増していく。1873年（明治6）に浅草寺界隈が浅草公園として整備されることとなった。これは、東京を近代都市化するための開発といえよう。そして、花屋敷の置かれていた地所の所有権が、浅草寺から東京府へ移行、それに伴い花屋敷の敷地面積も半減され、さらに借地料も段階的に増額されていく¹⁹。この難局に立ち向かっていったのは、維新後に森田家の婿養子となった旧幕臣・望月源一郎、すなわち三代目六三郎である。三代目は、花屋敷存続をかけて借地料の減免運動に奔走することとなる。

三代目が最初に借地料減免の嘆願書を東京府に提出したのは、1875年（明治8）のことであった。嘆願書では、一層仕事に励み、清潔保持はもちろん植物栽培に熱心に取り組み、四季折々常に人びとが観覧出来るように提供し公園の趣意を失わぬようもっぱら注意を払い経営を行う、と明記されていた。しかし、この嘆願書に対し東京府は、借地料は一般の規定なので、個人的な願いは聞き届けがたい、とあっさり却下してしまう²⁰。その後、三代目の努力が実り、手当金が支給されたり、庭園部分のみ借地料の増額が一時的に据え置かれたり、といった措置がとられるものの、借地料の増額自体を止めることはできなかった。

ところが、やがて東京府に誤算が生じてくる。浅草寺界隈の借地料の高騰は、滞納者を続出させることとなり、1877年（明治10）以降東京府はその対応に追われることとなる²¹。さらに1884年（明治17）に浅草公園が6区に分割され、興行・遊観場類は新たに設置された第六区域内に集められ、第五区域内には遊客を集められるような娯楽施設が花屋敷だけとなってしまふ。そしてその際同時に、浅草公園および旧千束村一円の借地料が改訂となり、翌明治18年2月から増額されることとなった²²。花屋敷の借地料は、わずか10年ほどの間に19倍にも跳ね上がったことになるのだが、第五区域内の他の借地人らの混乱も想像に難くない。東京府は借地料の値上げと引き替えに、滞納問題を常態化させてしまったのである。そこで東京府は、第五区の存続を花屋敷に託すこととなる。あたかも、浅草寺界隈の町おこしが花屋敷に託された、嘉永期の再現のように。

この時期、度重なる借地料の増額などによりすでに花屋敷の経営状態は悪化していた²³。そこで、起死回生を狙ったのであろうか、花屋敷を全面改装して見世物興行的な施設を廃止し、植物学士や子弟の研究に対応できるような本格的な植物園を開設する許可を、東京府から得ていたのである²⁴。ところが、値上げ実施直後の3月に新装開園し、10月から正式に名称を「花屋敷」と改めた同所は、山や池を築き亭舎や小道を設置し、遊歩や休憩の利便性を整え、珍奇の植物や動物を収集・配置し、遊覧のおもしろみを増すような施設となっていたことが、開園1周年記念イベントについて書かれた「朝野新聞」の記事から確認できるのである²⁵。つまり、当初の計画とはまったく趣を異にする施設ができあがっていたことになるのだが、同年11月、庭園部分の借地料が3分の1に減額がされることが決定する。どのような経緯で、花屋敷改装計画が変更されたのか、その詳

細を示す記録は残されていない。しかし、減額決定に至った東京府の見解から、おぼろげながらその事情を理解することができる²⁶。

（前略）植物園、今回花屋敷ト改称、営業法方改正し、全ク遊覧所ノ性質ニ相成候処、右花屋敷ハ開設以來規模大ニ備リ、小動物園ノ体裁ヲ為シタルヨリ、遊覧人モ群集シ、近傍ニ潤沢ヲ及ス不尠、今日ニ至テハ花屋敷ノ為メニ園内全般ノ賑ヲ相増候程ノ景況ニ有之候、然ルニ当初当公園改正ニ際シ、観音堂周囲ノ諸興行遊覧所等悉皆取払相成、何レモ六区内ヘ候ニ付、五区内ニ於テハ別ニ人目ヲ慰スルモノ無之ヨリ、自然寂寥ニ傾向スルノ恐モ有之、依テ当庁ニ於テ該地ニ動物園ノ如キモノ一ヶ所相設ケ候見込ニ有之候処、幸六三郎等ニ於テ他ニ率先シテ当花園ヲ開設シ、大ニ世坪ヲ博シ、好景況ヲ来シ候ハ、詢ニ公園ノ為メニ美挙ニ有之、（以下略）

すなわち、植物園を改めて正式に「花屋敷」と称する完全な遊興地となったが、小動物園の体裁のため観客も多く、近隣に少なからず経済効果が及んでいる、第五区が寂れないように東京府では動物園のような施設を設置する計画があったが、幸いにも三代目らが花屋敷を新装開園して世評を博し好況である、と高く評価しているのである。ただし、新装開園直後の明治18年3月から10月までの「損益調」には、「動物買入代」が1200円であったことが記されており、「諸建築費・庭木石買入代」の8500円、「植物買入代」の1800円に対して、そう高くない。またこの間の「動物餌料」も205円強で、支出総額の5%ほどである²⁷。したがって、この時期はまだ動物の数はさほど多くはなかったのではないかと考えられる。なお、深川の材木商山本金藏・松之助父子が、同年6月より花屋敷の共同経営者に就任している。



奥山閣の写る絵はがき（江戸東京博物館蔵 88133040）

さらに翌19年11月より向こう5年間、花屋敷の借地料が半減されることとなった。その理由について東京府は、前年10月に組織や営業法を改め完全な遊興地となったことに伴い、「遊覧場税」を課せられることとなった、また高額な借地料も負担になっており、「内外ノ奇鳥獸ヲ蒐集スル等シテ夥多ノ金円ヲ費ス」だけでなく、動物飼育用地を新たに借地したことで借地料が増額され、納付困難に陥っているため、と説明している²⁸。さらに続けて「若シ閉鎖スルニ至レハ本人共ノ不幸ハ扨置、第一公園ノ観ヲ損スル不少、(中略)畢竟花屋敷ノ盛衰ハ公園全般ニ影響ヲ持候次第故、自然閉鎖スル等ノ場合ニ至レハ不容易義」と主張、第五区における花屋敷の重要性を強調していることがわかる。

その直後の12月、三代目は花屋敷を去り、経営の全権は山本父子にゆだねられた。山本金藏はさっそく翌20年、園内に奥山閣の移築を計画、そのための用地を新たに借りる際、東京府は「異種ノ動物等ヲ集纏シ、縦覧ニ供シタル等ハ最モ其基因ト云モ敢テ不可ナキカ如シ」と、動物飼育を評価した上で許可を与えていたのである²⁹。

そして明治19年の減額措置から5年後の1891年(明治24)、さらに向こう5年間、3割の借地料減額が認められることとなった。その理由として、「浅草公園花屋敷ハ普通ノ営業ト異リ、珍奇ノ鳥獸草木ヲ蒐集シテ衆庶ノ娛樂ニ供シ」、自然と浅草公園の美観を補っているため、とし、さらに「元来花屋敷設立ニ付テハ当初府庁ノ勧誘ニ係」わっており、年限中に本人の都合で転業した場合には満額に戻す、という条件をつけている³⁰。つまり、実際は三代目が率先して改装したわけではなく、東京府の意向によって行われていたのである。借地料の減額を求め続けてきた三代目に、その拒否権があるはずがない。花屋敷を存続させるための、苦渋の選択であったろう。跡を受け継いだ山本金藏にも、もはや選択の余地はなかった。

結局東京府は、第五区界隈を発展させることにより借地人らの収益を増やし、借地料収入の安定化を図ろうという、あくまでも自己都合により花屋敷の存続を求めていたのである。そのために東京府が重視していたのが、動物園であった。

4. 動物園化する花屋敷 ～むすびにかえて～

山本父子も、1894年(明治27)に花屋敷を去った。その後は、所有者を次々と代えながら、花屋敷の動物園化は加速する。1896年(明治29)には、24年当時と同様の理由と条件で、さらに向こう5年間、2割の借地料減額が認められている³¹。1898年(明治31)刊行の『新撰東京名所図会』には、梅、福寿草、水仙、椿などさまざまな植物の他、多くの動物の飼育されていたことが記されている。その種類はトラ、シカ、ツル、クジャク、金ハト、リス、バリケン、オカメインコ、ブンチョウ、セキレイ、カナリヤなどで、「近時は鳥獸をも畜へば。花屋舗と云はむより寧ろ動物園と植物園を合併したらむが如き異観を呈し」ていたという³²。



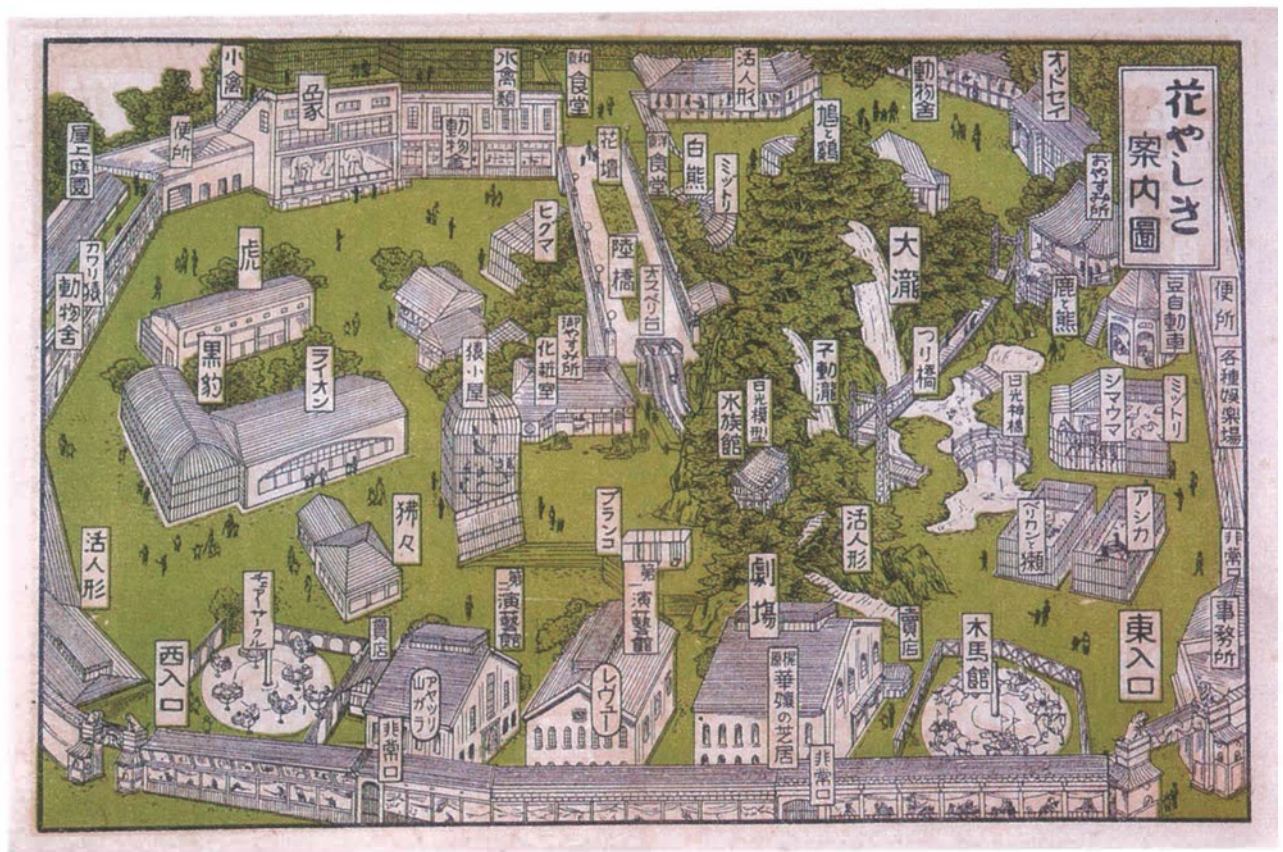
明治43年の花屋敷。入口正面メインの看板にはゾウなどの動物が描かれる
(江戸東京博物館蔵 88133145)

また、1903年（明治36）刊行の『浅草案内誌』には、海外万里の猛獣異鳥を談笑の合間にかくも遊覧できるのは、園主の苦心と文明の賜である、と賞賛のことばが綴られている³³。さらに1910年（明治43）刊行の『浅草繁昌記』には、園内で飼育している動物は、東洋・西洋の猛獣珍禽などを集め、ある点においては上野動物園に勝るところがある、と評されている³⁴。

では、東京府はなぜ動物園に固執していたのであろうか。先述の通り、江戸では「花鳥茶屋」や盛り場の見世物興行などで、珍しい動物を鑑賞する習慣があり、人気を博していた。1882年（明治15）には、帝室博物館の野外展示施設として上野動物園が開園する。この年の博物館の入場者が9万人であったのに対し、動物園の入園者は20万人であり、クマ、キツネなど動物のほとんどが日本産であったにもかかわらず、開園当初から注目を浴びていたとの評価ができるという³⁵。1887年（明治20）にはトラ2頭が加わり、入園者は24万人を超え、開園以来の最高記録となる。また、並行して外国産の動物も増やし、翌21年にはアジアゾウ2頭が加わり、22年の入場者は38万8000人を超えている。26年からはゾウの芸を見せるようになり、この動向は「博物館の付属施設としての学術的性格から少し距離をおき、大衆的な娯楽施設への第一歩を歩きだし始めた」と指摘されている³⁶。

こうした上野動物園の入場者数を見た限り、東京府の経営判断はあながち間違いではなかったといえるのかもしれない。しかし、結果的には江戸がえりしてしまったものの、元来江戸的なものを否定する傾向にあった明治政府および東京府の政策を考慮した場合、当然両者とも、東京という都市の近代化を視野に入れた施策を練っていたはずである。近代化の象徴、そのひとつが上野に計画された帝室博物館構想であり、開園当初めぼしい動物のいなかった上野動物園を補完する施設として、花屋敷を位置づけようとしていた可能性についても、検討する必要がある。

いずれにせよ、東京の近代化の一環として公園政策が実施され、それに伴い浅草公園の借地料が高騰し滞納者が増加、その窮地を救うべく東京府が利用したのが、江戸の名所・花屋敷だったのである。花屋敷が、東京の近代化の一端を支えていたといっても、過言ではなからう。



昭和初期 動物園と化した花屋敷
(江戸東京博物館蔵 95202662)

註

- 1 拙著『江戸ッ子と花屋敷』小学館、2006年
- 2 『浅草寺日記 第二十五卷』（金龍山浅草寺、2005年）p.28
- 3 前同書2、p.32
- 4 「嘉永五年 町奉行上申書」（『日本都市生活史料集成二 三都篇II』学習研究社、1977年）p.677
- 5 斎藤月岑『増訂武江年表 2』（平凡社、1968年）、p.129
- 6 『近世風俗見聞集 第四』（国書刊行会、1913年）、p.330
- 7 個人蔵
- 8 川畑貞子「偲び草」私家版、1997年
- 9 ロバート・フォーチュン『幕末日本探訪記 江戸と北京』（講談社、1997年）、p.139～14015 大正15年12月18日 「東京市墓地改葬規則中改正」
- 10 棚橋正博・村田祐司編『絵でよむ 江戸のくらし風俗大事典』（柏書房、2004年）、p.306～307
- 11 早稲田大学図書館古典籍総合データベース
- 12 国立国会図書館デジタルコレクション
- 13 『浅草寺日記 第三十二卷』（金龍山浅草寺、2012年）p.457
- 14 『大日本名所図会 第1輯第5篇 摂津名所図会』（大日本名所図会刊行会、1919年）、国立国会図書館デジタルコレクションコマ番号257
- 15 柳沢信鴻「宴遊日記」安永2年（柳沢文庫蔵）
- 16 「家兔競」（江戸東京博物館蔵、資料番号09200189）
- 17 浅草寺蔵。未刊。
- 18 『風俗画報』第249号（東陽堂、1902年）、p.24
- 19 拙稿「浅草花屋敷における借地料減免運動の展開」（神戸大学経済経営学会『国民経済雑誌』第188巻第4号、2003年）、p.68
- 20 東京都公文書館蔵「浅草公園諸願伺」（東京市役所編『東京市史稿 遊園篇第4』、1932年、p.741）。
- 21 東京都公文書館蔵「浅草公園例則ニ係ル願伺」（東京市役所編『東京市史稿 遊園篇第4』、1932年、p.1047～1048）
- 22 東京都公文書館蔵「各公園例規」（東京市役所編『東京市史稿 遊園篇第5』、1933年、p.870～876）
- 23 前同書19、p.70
- 24 東京都公文書館蔵「回議録 第弐類」
- 25 『明治ニュース事典 第3巻』（毎日コミュニケーションズ、1984年）、p.14
- 26 前同書22、p.1145
- 27 東京都公文書館蔵「各公園例規」
- 28 東京都公文書館蔵「東京府命令録」（東京市役所編『東京市史稿 遊園篇第6』、1936年、p.89）
- 29 東京都公文書館蔵「庶政要録」（東京市役所編『東京市史稿 遊園篇第6』、1936年、p.232）
- 30 東京都公文書館蔵「庶政要録」（東京市役所編『東京市史稿 遊園篇第7』、1953年、p.114～115）
- 31 前同書30、p.756～757
- 32 宮尾しげを監修『東京都名所図会 浅草公園・新吉原之部』（睦書房、1978年）、p.83～86
- 33 佐伯徳海編『浅草案内誌』（金龍山梅園院、1903年）、p.55
- 34 松山伝十郎編『浅草繁昌記』（実力社、1910年）、p.243
- 35 石田戢『上野動物園』（東京都公園協会、2000年）、p.89
- 36 前同書36、p.91